

地域づくり表彰

かまくら応援隊
(長野県飯山市)

かまくらづくりで地域づくり

～「かまくら応援隊」活動中！～

かまくら応援隊

隊長

ひらい かつみ
平井 勝美



1. 飯山市の概要

飯山市は、長野県の北部に位置し、市の中央に千曲川が流れ、西は新潟県上越市と妙高市に接する盆地にあります。唱歌「故郷」や「朧月夜」の舞台としても知られ、四季折々の様々な自然景観や人々の営みは、どこか懐かしく「日本の原風景」とも称されます。



唱歌「朧月夜」の風情がそのまま残る菜の花公園

また、平成 27 (2015) 年 3 月に、市民の永年の悲願であった北陸新幹線飯山駅が開業し、東京や金沢などの大都市と直接結びました。

この機会に、信越 9 市町村（飯山市・中野市・木島平村・野沢温泉村・山ノ内町・栄村・飯綱町・信濃町・新潟県妙高市）では、新たに広域観光圏「信越自然郷」を立ち上げ、世界水準の滞在型リゾートを目指した地域ブランドの形成に取り組んでいます。



北信五岳
(長野県北部にそびえる 5 つの山の総称)

2. 活動開始の背景・経緯

日本有数の豪雪地帯、長野県飯山市の信濃平スキー場が平成 13 年に閉鎖されることになり、スキーに代わる地域の新たな魅力創出のため、地元の民宿経営者らが始めたかま

ら作りとかまくら祭りが「かまくら応援隊」発足のルーツです。

当初 4、5 人で地道な活動を続けていたところ、豪雪や寡雪の年も経る中で、徐々に活動に賛同してくれる有志が増え、平成 20 年に「かまくら応援隊」を設立しました。



かまくら作りの様子

3. 活動の広がり

かまくら応援隊では、地元で開催されるかまくら祭りのみならず、各地の要請を受け、市内外のスキー場やイベント会場をはじめ県外にも出かけたかまくらを作るとともに、かまくらの広報や知名度アップに努めています。

また、一般社団法人 信州いいやま観光局と連携し、かまくらの情報発信や誘客宣伝などを行っており、平成 24 年度から観光局とのタイアップで、かまくらの中で地域食材たっぷりの「のろし鍋」を食べていただく「レストランかまくら村」を中心とした着地型旅行商品を販売。同時に、「レストランかまくら村」を含めたスキー場周辺の水田一帯を「かまくらの里」として地域のブランド化を図り、プロモーションを展開したところ、かまくらの風情と鍋の調和が好評で、外国人を含めて来場者が年を追って増加するようになりました。なお、のろし鍋をかまくらに運ぶ役割は、「かまくら応援隊レディース」という地元の女性陣が活躍しています。

また、鍋の具材の 1 つである里芋の生産や供給は、地域で障がい者の就労を支援する事業所の利用者が行

っており、かまくらのシーズンには鍋運びに従事するなど、レストランかまくら村は働く場、社会交流の場ともなっています。



かまくらの中で食べるのろし鍋は外国人にも大人気

4. 継続性

かまくら応援隊の持続可能な取り組みを目指し、観光局とともにレストランかまくら村の利用料金を見直したり、関連グッズを共同開発したりして、当初ボランティアとしてかまくらに携わっていた活動に報酬が支給できるようにするなど、地域の稼ぐ力を導く戦略的な事業の展開に当たっています。

平成 30 年度からは飯山市が認定を受けたどぶろく特区を活用して、地元の良質米コシヒカリを使った「どぶろく・かまくらの里」を、資格を有するかまくら応援隊員が醸造して、レストランかまくら村で提供するなど、常に新たな取組に挑戦しています。



新たな取組、どぶろくづくり

5. 地域資源の活用

豪雪地帯ならではの雪を強みにし、「かまくら×レストラン」という他

にはない取組を行っています。

また、レストランで提供するのろし鍋には、地域のブランド豚である北信州みゆきポークや信州の伝統野菜に認定されている里芋の坂井芋のほか、特産のきのこや薬物野菜など地元食材をたっぷり使っています。

なお、地域のシンボルである黒岩山にかつて上杉謙信方ののろし台があり、ふたを開けた時の湯気の立ち上がり様子から、のろし鍋と名付けています。



地元食材をたっぷり使ったのろし鍋

6. 創意工夫

かまくら応援隊が作るかまくらは、「かまくら君」というバルーンを使用する独特な方法で造っています。



地元企業とのコラボ商品「かまくら君」

かまくら君をエアで膨らませ、そこに除雪機で雪を飛ばし、応援隊が厚さや固さを見極めながら、足踏みやスコップで形づくっていく方法で、短時間のうちに形の整ったかまくらを製造することができます。

かまくら君は、かつて地域で操業していたハングライダーやカヌーを生産する民間企業が、その生地を素材として作ったもので、地域と企業がコラボした地域発の技術革新と言えます。

また、かまくらの里では、レストランかまくら村のほか、来場者が雪を満喫できるように、雪上車やスノーモービルの乗車体験や、そり遊びをはじめとした雪と遊べるいろいろなメニューを提供しています。

近年では、IVUSA（イビューサ=NPO 法人国際ボランティア学生協会）の

大学生もかまくら祭りのイベントの企画・運営に携わり、スノーボウリングやかまくらペイントといった子どもたちが雪と戯れる仕掛けを提案・実行して、学生自身も雪と遊びながら誘客に貢献しています。



IVUSA と連携

7. 成果

継続的な取組や新たな連携によって、かまくらの里への来場者は増加しており、平成24年度から始めたレストランかまくら村は、当初1,000人ほどの利用者数でしたが、平成30年度には約5,000人に増え、うち3割は外国人が占めるに至りました。また、2月中旬に開催するかまくら祭りには、2日間で1万人を超える来客があります。

こうした状況から、今やかまくらは飯山市の観光パンフレットの表紙を飾るほか、信州いやま観光局の一押しのキラコンテンツに成長し、海外の旅行雑誌にも紹介されるようになりました。



飯山市観光パンフレット

また、平成28年度には観光庁の広域観光周遊ルートモデルコースのスポットにも認定されました。

8. 課題と展望

レストランかまくら村やかまくら祭りには、なんと言っても雪が必要です。降雪は自然現象であり、豪雪や寡雪に苦しみながらも、行政をはじめ各方面と連携して事業を継続して来ました。今後も降雪に気をもみながらも、応援隊員同士、大いに楽しみつつかまくらの里を続けていきたいと思っています。

かまくらを増やすことや、後継者の育成は大きな課題です。様々な関わりの中で、自分の都合のいいときに手を貸してくれるような仲間を徐々に増やしていきたいと思っています。

かまくら祭りが第10回目を迎えた平成21年度には、記念イベントとして「全国かまくらサミット」を開催しました。雪国の地域づくりをテーマに、かまくらという雪国文化について、歴史ある秋田県横手市や長野県大町市のかまくら職人などにお越しいただき、かまくらという雪国の資源をお互いに再認識しました。



かまくらサミットの様子

来年令和2年のかまくら祭りは第20回目という節目の年となることから、かまくら応援隊では「かまくらシンポジウム」の開催を計画しています。かまくらの持続可能な今後の展望をテーマに、かまくらに関わるいろいろなコトやモノや人に着目し、かまくらの裾野を広げていこうとする試みです。

また、かまくら作りで親交のある市町村の皆様にお出でいただいて交流を深め、相互にかまくらの魅力を発信していけたらいいと思っています。